二百文字詩集「コトダマのざわめき」

那音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二百文字詩集「コトダマのざわめき」

【Ｎコード】
Ｎ４０５２Ｙ

【作者名】
那音

【あらすじ】
今日もコトダマが響きます。

あなたを愛しているから

あなたがいて、その隣に僕がいる。

当たり前かもしれないけど、これがすごく幸せだと思う。

一人きりでは生きられない弱い人間の僕は、こんなにも愛しい人に出会うことができた。

それは、計り知れない奇跡。

何も言わなくても、あなたのことが手にとるように判るから、きっとそういう運命なんだね。

言葉にしたら嘘になってしまいそいだけど、僕はあなたと出会えて幸せなんだ。

もっと近くにいれるように、もっとあなたを知りたいんだ。

いつまでも

いつだって一緒にいれるように、ボクの中に強くキミを残そう。

いつだって思い出せるように、キミを強く覚えていよう。

死んだからって忘れられる程度にキミのこと好きだった訳じゃない。

カタチはどうあれ、ボクたちは永遠を手に入れたんでしょう。

だから、がんばって思い出すよ。

このくしゃくしゃの泣き顔を笑顔に変えてしまう、キミの声を。

きっとすぐに笑ってみせるから。

キミがいなくても大丈夫なように、強くなってみせるから。

うまく笑おうとしなくても

うまく笑おうとしなくても、きみが笑えばそれだけで空が晴れていくようだよ。

まるで世界中の幸せをここに集めたような、そんな感じ。

なんだかね、見ているだけで心がすっきりするんだ。

苦しいとき、辛いとき、何度も思い出しては歩みを進めてきたんだよ。

うまく笑おうとしなくても、きみはずっと輝いているよ。

そんな小さなことでくよくよしないで、もっと大きな声で語ろう。

うまく笑えなくても、夢はどこかに行ったりしないから。

えっとね、

ボクにはもうわからないんだ。

キミが好きすぎて、なにが正しいか正しくないかがわからない。

うまく言葉にできても、それは当たり前のことで。

ボクがキミをどんなに好きかは、案外伝わったりしない。

まるでやりがいのあるゲームみたいに、いつまでたっても進みやしない。

だけど、きっと無駄じゃないと思うんだ。

……えっとね、キミが大好きなんだ。

今日は、それが言えればいいや。

じゃあね、また明日。

明日はうまく言えるといいな。

おしおき

君にいじわるなことを言った。

君がおかしな顔をした。

ボクはちょっと残念になって、君に話しかけ続けた。

好きになるのは罪なの？

だったら、好きになってもらえないのは罰なの？

会いたいと思うのは罪なの？

だったら、会えないのは罰なの？

それとも、おしおきとかいう温いものなの？

だめだよ。

君に会えないのはいやだけど、君がいやな顔するのはもっといや。

だから、ボクは黙って、おしおきを受け入れるよ。

大丈夫、心配ないからね。

かぞえきれない

今日また、きみがすてきだと思った。

これでもう何度目だろうね。

今日また、きみがかわいいと思った。

これでもう何度目だろうね。

別れはいつも突然だけど、そんなのあまり関係ない。

どんなに離れていても、すぐそばにいるような安心感。

きみがくれた言葉のぬくもりは、まだ冷めてないよ。

今日また寂しいと思った。

これでもう何度目だろうね。

今日また泣きたくなった。

思いっきり泣いてみた。

初めて泣いてみた。

静かに心が揺れたよ。

きみのきもちもわからないのに。

きっとボクだけは、きみを喜ばせることができると思い込んでた。

どんなにひどいこと言ったって、笑えば許してくれると思ってた。

ボクだけがきみの理解者でいるつもりだった。

きみのきもちもわからないのに。

きみが初めて泣いたとき、ボクの胸に稲妻が走った。

その痛みを盾にして、涙を見ない振りした。

きっとうまく笑えると思い込んでた。

きみも笑うと思い込んでた。

きみのきもちもわからないのに。

ボクのきもちはかわらないのに。

くじびき

あたり。はずれ。あたり。はずれ。あたり。あたり。

「はずれの人たちで、今日の放課後お掃除してね」。

先生はゆっくり言った。

俯くと、手のひらにははずれくじ。

友人はそっと同情したけど、同情するのはボクがきみにだろ。

教室掃除のお相手は、みんなの憧れかわいいあの娘。

はずれくじなんてとんでもない。

なによりの宝物だったよ。

おおあたり。

このチャンスに、目一杯あの娘にアピールするんだ。

自然に「すき」って言えるように。

けっこう本気なんだぜ。

冗談ぽく聞こえるのは、案外照れ隠しだったりすんるだぜ。

そんな薄っぺらいこと言うのは、案外苦手なんだぜ。

うまくいかないけど、けっこう本気なんだぜ。

キミが好きだ。これ以上ないくらいに。

世界で一番好き。

冗談ぽく聞こえるのは、案外照れ隠しだったりすんるだぜ。

好きって簡単には止まらない感情。

笑えるかなんてその時次第だから、いちいち悩むのはアホらしい。

だからまっすぐ届くように。

ずっと、キミのこと、好きなんだ。

こころが揺れた。

ふとした瞬間に、ふわり、こころが揺れた。

見慣れているはずの君の横顔なのに。

君ってこんな表情もできるんだって、きづいた。

そのとき、こころが揺れたよ。

固く閉ざしていた、ちっぽけなこころが揺れた。

なんだかね、いつもと違うの。

「好き」ってのとはちょっと違う。

それよりも、見てて和む、そんな感じ。

ねぇ、これも「好き」ってことなのかな？

よくわかんないや。不思議だね。

大人になったらわかるのかな。

ねぇ、教えてよ――

さあ行こう。

クヨクヨしたって時間の無駄さ。

十年後に、絶対後悔するって！

今日明日のこと変えるなら、思いきって即行動！

最初は誰も臆病なだけさ。

だいじょうぶ、きっとうまくいくって。

イメージできたなら、さあ行こう。

キミに手招きをしてるのは、きっと明るい未来だから。

前だけを見るのが不安になったら、いつでも振り返って良いから。

だから、勇気を出して一歩進んでみようよ。

きって景色がやさしくなるさ。

悩むくらいなら、さあ行こう！

しょうがないを言い訳にするな

「最近どうも調子悪い」。

だから？

「しょうがない」？

そう考えてるなら、一生うまくなんていかないだろうね。

しょうがないを言い訳にすると、自分も周りも納得しちゃうかもしれない。

だけど、それって結局進歩してないじゃん。

だから、おまえに伝えておく。

未来の、そして過去の俺に。

よく聞け、覚えておけ。

しょうがないを言い訳にするな。

そんなこと言ってると、反省しない。進歩しない。

なあ、わかるだろ。

気づけたら、勝ちだ。

すきの理由なんて

だいたい、そんなこと言ったら嘘っぽくなっちゃうよ。

あることないこと喋り散らすよりは、謙虚に誠実に正直にね。

キミが笑えば万事解決、損得勘定も関係ない。

だって、ボクにとってそれだけがすべてだから。

なにもないはずの心に、芽生えてたんだ。いつの間にか。

キミならわかるでしょ。

理由なんて知らない。理由なんていらない。

事実を理解できればいいんだから。

強いて言うなら、キミがいるから。

すきの理由なんて、そんなもん。

せのびなんかしないでさ

ちょっと遠くを見るためだけにせのびしちゃっていいのかい。

来た道も振り返れないのに、もう先ばかり見てるのかい。

なんなんだろうね、よくわからないけど。

いいことがあったら、それはきっと君の努力のお陰だろ。

だったら、せのびなんかしないでさ、真っ直ぐすすんでみろよ。

すぐになにもかもできるわけじゃないけどさ、今しかできないことってあるだろ。

だったらまずはそれをしようよ。

心配しなくても、失敗しないから。

大丈夫。

そばにいるから

そんなこと言えたらなんて楽だろう。

かっこつけてるとか、そんなんじゃないけど。

そういえば、昔誰かも言ってた気がする。

本当に苦しいときに恥ずかしげもなく言えるのが勇気だ。愛だ。

そんなのわかってるさ。だからこその言葉だろ。

表情とは違う形で愛を伝えるのが言葉だろ。

そばにいるから。それだけで君が笑うなら嘘なんてつけないさ。

そばにいるから。嘘じゃない。そばにいる。

なにがあっても、ずっと。

だって君が好きだから。

たびにでもでればいいじゃん。

大っ嫌いで、大好きなもの。

全部知ってるつもりで、なにも知らないもの。

自分自身がクヨクヨするようなときは、なんだか周りはフキゲンだったりする。

自分探しだとか、かっこつけんなよ。

別に誰も止めようとはしない。

たびにでもでればいいじゃん。

そして、必ず大きなタカラモノを持ち帰ってくるんだ。

周りの声に左右されるような、器用な思考回路持ってないんならさ。

たくさん泣いて、たくさん笑って。

それができりゃ、儲けもん。

ちがうなにか

朝陽が昇れば、なにか変わるのかな。

月を憂いているだけじゃ、なにも変わりそうにないね。

だって、暗い気持ちだけしか伝わらないよ。

笑顔の意味さえ忘れて、泣きゃいいと思い込んでる。ちがう？

明日になったらとか、うまくいったらとか。

そんなんじゃなくて、ちがうなにか。

もっとあったかくて、もって照れくさくて。

もっとやさしくて、もっと――きみらしいこと。

ちがうなにか。案外それは、意外にもすぐ近くにあったりするんだ。

つかれてる？

最近、あんまり笑わなくなったね。

なんでだろう。あんなに素敵な笑顔だったのに。

ねぇ、大丈夫？　ちゃんと眠れてる？

そっちがそんなにしぼんでると、なんだかこっちまで悲しくなっちゃうよ。

つかれたらなら、無理しなくていいからね。

休みたければ、休んじゃえばいいよ。

体壊したら、余計に笑えないよ。

どうせ無理するなら、無理して笑えよ。

つかれたときには、笑うのが一番だって。

ゆっくり休んでね。

明日にはもっと笑えるように。

てのひらよりも

ボクは黙って差し出した。
キミも黙って握り返した。
少しだけ汗ばんでるけど、キミが隠したがってる。
だから、知らんぷりで鼻唄をうたう。

キミの鼓動はなんか早くて、つられてボクのも早くなるよう。
右手と左手は仲良く、でもまだ目は合わせられない。

キミがクスクス笑ったから、ボクはニヤニヤ笑ってみる。
なんでもないことのような気がして、忘れまいと強く手を握った。

ボクのくちびるは、まだキミのくちびるをおぼえているから。

ともだち

たとえば笑うだけで心は晴れる。
たとえば泣くだけで心は腫れる。

細かいこと気にしすぎだって。
そんなことないだろ、ぜんぶだいじなこと。

心が痛むなら傍にいよう。
できるだけ君のすぐ傍に。

慰めてさ、励ましてさ、そして最後に笑えりゃいいじゃんか。

今更なんて、ボクと君はずっとずっと近いはず。

やっぱそうだね。

君が笑ってんの見ると、ムッとなんてしてられない。

ともだちなら。
ともだちだから？

ともだちじゃん。
ともだちだろ。

なんでかな

キミといるだけで、なんだか心が晴れていくようだ。
なにも望まないのに、どんどん幸せになっていくんだ。

ボクにとって太陽のように、キミはまっすぐ輝いているよ。
なんでかな、うまく言えないけど、体がじっとしていられないような、不思議な感覚。

キミと一緒じゃないとまずたどり着けないような、すごくすごく遠いところ。

キミがこんなに近くにいてくれるから、手に入りそうな気がするんだ。

キミがいなけりゃ、気づけなかったよ。

にげるな。

怖い？
――だろうね。
きつい？
――だろうね。
疲れた？
――だろうね。

だからって、逃げるのかい？
逃げれるのかい？

うまくいかないとか、誰も理解してくれないとか、言い訳はいくらでも作れるよね。

でも、それで納得できるとは限らないもの。

理不尽には怒ればいいし、少なくとも逃げるようなことじゃない。
うまく笑えないからって背中見せるのは、なんだかちょっと違う。

あのね、涙は流していいんだよ。
しっかりと前さえ向けてれば。

ぬいぐるみ

黙っとけば可愛いってよく言われる。
だけどそんなんじゃダメ。あたしはダンシングドール。
じっとしてるぬいぐるみじゃないの。
なんだか損してるみたいじゃない、動かないと。
何も言えないまま事が終わると、どうせ残るのは喪失感とか虚無感とか、そんなもの。
だから、可愛いぬいぐるみじゃいられないの。
踊り続けて疲れるくらいが、楽しかったって言えるじゃない。
暗いことも乗り越えて行けば、きっと笑顔に迎えられるはずだから。

ねむってしまえば

たとえば辛いことがあったとして。
たとえば悲しいことがあったとして。
たとえば泣いてしまったとして。
たとえば怒ってしまったとして。

もしもいい夢が見れたなら、多分きっといい気持ちで笑えるよ。
ねむってしまえば楽になるって！
どうせ、よくないことばっか思いついてるんでしょ？

どうしても無理って思うんなら無理しないでさ、たまにはゆっくりと眺めてみようよ。
いままで早足で通りすぎてきた景色をさ。
以外といいもんなんだ。

のんびり行こうか。

後ろを見るなとは言わない。
だけど前ばっか見てると飽きちゃうでしょ。
誰かのペースなんて気にしないでさ、たまにはのんびり歩いてみなよ。
いいことばかりじゃないかもしれないけど、悪いことばかりでもないだろ。
寂しくなったらいつでも思い出せるように、しっかりと瞳の奥に焼きつけているでしょ。
のんびり行ったからって損をする訳じゃない。
今までできづけなかったいろんな事が、きっとわかるようになるから。
のんびり行こうか。

はずかしがって

最近なにをやるのも億劫そう。面倒そう。
滲んでる倦怠感を隠そうともしない。
なんかつかれてるんだよね、わかるよ。
最近はハードな事件ばっか、ゲストにやさしいなんて程遠い。
ハートに突き刺さる言葉なんて、期待されても困るけどさ。
要は思うこと伝えりゃいい。
今さらはずかしがって、止めたりしない。
湿っぽい瞳無視できるほど薄情じゃない。
怖いなら、泣いてもいいから。
楽しいなら、笑ってもいいから。

君は、君を、見失うな。

ひみつ。

「なんで？」
ほんとに不思議そうにキミは尋ねるね。
「それはね」
君の表情が可笑しいから、ボクはもったいぶるんだ。
「……」
言わないよ。まだ言わない。
「ひみつ」
口に出してしまうと、なんだか嘘になりそうで怖いよ。

ばかだね。
ちゃんと伝えなきゃいけないのに、まだボクは恥ずかしがってる。
なかなか言葉にできないよ。ばか。
恥ずかしいって、罪だね。
いつか、行動で伝えるから。
もう話題に出さないで。いつか行動で伝えるから。

ふたり

いつからだろう。
ただキミが好きなだけじゃなくて、傍にいれるだけでいいって思うようになった。
凍えたあたしの手を握ってくれるように、やさしくキミの体温に馴染んでいった。
口にしちゃいけない気がして、それ以上に恥ずかしくて。
この距離で満足できてたのに、もっと近くにって。
キミのこと好きだよ。おかしくなりそうなくらい。
もしキミがこんなあたしのことを好きになってくれるなら、ふたりは最高のふたりになるね、きっと。

へぇ？

まさかそんな台詞が聞けるとは思わなかった。
こっちの勝手なイメージだけど、キミってもっと気むずかしいこと考えていると思ってた。
へぇ？　案外やさしいとこあるじゃんか。
へぇ？　案外子どもっぽいとこあるじゃんか。
なんだか、こうしてみると気づかなかったことに気づけるね。
キミのいくつかの笑顔に意味があるなら、キミはどれほどの重みを以てその仮面を被る？
無表情なそのしぐさに、どれほどの愛を込めている？

ねぇ。

――へぇ？

ほんとのことを伝えたら

正直に生きたいとは思ってる。
あまり嘘なんてついたりしないでさ、気楽に生きていきたいと思ってる。
なんだって口にできるくらいにはきみのことを信頼してるし、愛してるつもり。
だけど、だからこそこわいんだ。
ほんとのことを伝えたら嫌われてしまいそうな気がしてさ。
ほんとのことを伝えたらもう二度と会えない気がして。
キミに伝えることができたらどんなに楽なんだろう。
キミに直接嫌いって言われたら、簡単に諦められるのに。

まるですぐそばにいるように

旅立った君のこと、きっとあたしは忘れたりしないよ。
君に大切なこと教えてもらうまでは、きっと悲しくて悲しくて、涙で前も見えなかったと思う。
だけど、君は大切なことを教えてくれたから、辛いけど、悲しいけど、まだ前を見れるよ。
まるですぐそばにいるように、君のことをリアルに思い出せるの。
離れてたって伝わるから、ことばじゃ話せないことまで伝えるから。
あたしも君の帰りを待つよ。瞬きせずに君を迎えてあげるからね。

みたことのない君

君は深刻な顔をしてる。
僕の知らない顔、問い詰めるような瞳。
声をかけたほうがいいのか、そっとしておいたほうがいいのか。
君がなにを考えているかは、僕にはまだわからない。
君のことが好きってのと、なんでも知ってるってのは話が違う。
なぜ暗い顔をしてるの？　自分を責めているような暗い顔。
なにがあったかは、わからないけど。
もしクヨクヨ引き摺ってしまうくらいなら、いっそ忘れてしまえ。
恋人に、そんな顔して欲しくない。

むくちになって

ねえ、まだ照れてるんでしょ。キャラにもないようなことを言っちゃって、恥ずかしくて、照れ隠しになにも言わない。
そんなことくらいはボクにもわかる。
それ以上のことはイマイチわからないけど。
ねえ、笑っていればずいぶんかわいいのに、もったいないよ。
誤解されてしまうようなことになっても、どうしようもないし。
君のこと理解したい。君のすべてを知って、フェアな立場で接したいんだ。
だから、もっと君のことしゃべってよ。

めずらしいじゃん。

メイクしてるんだ。へぇ。
しなくてもかわいいとは思うけど、したらしたでかわいいね。
お世辞なんかじゃない。俺、そんなに器用じゃないし。
思ったことは言うらしいから、俺が言うことは素直な感想と捉えてほしいけど。
しゃべり方変えるとか、髪型変えるとか、そんなんよりもいいと思うよ。
君の魅力を上書きしない、すごく自然な白。なんだか、表情も明るくなってる。
ここまできた。あとは前向ければいい。
前向ければ、早く進める。

もう一度

何度転んだって、ゴールが近づきやしない。
だけど、「やれる！」って思い込んだら、なにもかもできるようになる気がした。
もう一度って思えるときだけ、道は拓けてくるんだ。
トラウマだとか、なだかんだ理由つけて、結局逃げてるだけじゃん。
そんなんじゃなにもできないよ。やる気のないやつに、神様は試練もチャンスも与えない。
もう一度って思えるなら、もう一度チャンスは訪れる。必ず。
何度も失敗して少しずつ強くなるんだろ。

やさしさの中で

そういうふうに、ちょっとしたとこに気を配れるとか。
そういうふうに、黙って手をさしだすとか。
たぶん、君以外誰にもできないと思うよ。建前じゃなくて本音で動くって、そうそうできらることじゃないと思う。
そんな君のすぐ傍で、やさしさの中で、僕も少しずつ変われているかな。
やさしくされたら、もっと君のこと好きになっちゃうよ。
止まらないくらいに、君が好きになってるんだ。
そういうことだって、君の隣で気づいたんだよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4052y/

二百文字詩集「コトダマのざわめき」

2011年12月15日23時53分発行